

日々努力の大切さ説く



思いを込め校歌を歌う児童たち

わが校歌

- 一、遠きは西に那須の嶺
近きはここの関の山
山の高きも土くれの
小さき積りて成ると知る
- 二、低き積りて日に進み
やがて高きにいたるべし
小さきわが身の今にして
励まざらめや時速し
- 三、時のとうとさ顧みて
心を磨き身を鍛え
ほまれいみじき名君の
あとを学ばせ世に立たん
- 四、関や白河世にしるき
歌にもしるきにしえよ
郷のほまれを新たし
つくせ世のため国のため

作詞 土井 晩翠
作曲 島崎赤太郎

白河一小 白河市

白河第一尋常高等小学校の流れをくむ白河市の白河一小の校歌は、1929（昭和4）年に制定され、昭和初期には市内の小学校全てで同校の校歌が歌われていたと伝わっている。「荒城の月」で知られる土井晩翠の作詞、島崎赤太

郎が作曲を務めた。創立130年を迎えた同校では、児童たちがその伝統と歴史を歌い紡いでいる。校舎周辺には、国指定史跡・名勝「南湖公園」のほか、小峰城跡、戊辰戦争・白河口の戦いで激戦が繰り広げられた稻荷山古戦場跡があり、史跡に囲まれた環境で、児童たちが日々勉学などに励んでいる。

大杉和規校長は「歌詞は物語のようになっており、児童を勇気づける校歌です」と説明する。大きな山も小さな山も同じ土が固まってできている。一つ一つの積み重ねが山を高くし、毎日、努力し続けることの大切さを説いているという。また、心と体を鍛えれば白河を治めた名君のようにもなれると歌詞は続く。

上級生が1年生に校歌を教える慣習が残る同校。大原花さん、木田夏希さん（6年）は「『つくせ世のため国のため』の歌詞が好き。社会に貢献できるような人間になりたい」と話していた。